

【歴史・民俗】

## 吉田初三郎と鳥瞰図

名古屋大学大学院環境学研究科 都市環境学専攻

建築・環境デザイン 准教授 堀田 典裕

### はじめに

おはようございます。名古屋大学の堀田です。本日はこのような場所に招待していただき、日本福祉大学知多半島総合研究所の曲田先生はじめ、皆さまにお礼を申し上げます。

先ほどご紹介いただきましたように、近々、初三郎の本を出します。『吉田初三郎の鳥瞰図を読む』という本を2009年に出したことが話のきっかけです。本日、話すことはここに書いてあることが中心になります。初三郎がどのような人物だったのか、そして、その鳥瞰図の特長、初三郎の鳥瞰図はどこから出てきたのかを話します。

この表紙ページの上側の鳥瞰図は南知多の鳥瞰図で、内田佐七が率いていたバス会社がクライアントです。この上側も有名ですが、下側もまた有名な事例で、知多の巡拝図絵です。初三郎はどうしてこのようなものを描けたのでしょうか。それを説明したものがこの本です。河出書房から2009年に出版されました。Amazonの東洋日本美術史部門で1日だけ、1位になりました。2015年の3月5日です。

皆さん、Googleのトップページを覚えておられますか？普通はGoogleとだけ書いてありますが、文字に装飾がしてある日があり、その日に起こったことにちなんで挿絵が入ります。2015年3月4日は吉田初三郎の生誕130周年で、彼が京都の町を西から東に向かって描いた絵の、町の中に走っている路面電車を利用してGoogleと描いた絵がトップページでした。このトップページのおかげで吉田初三郎とはどのような人だという話になり、私の本が売れたようです。

2015年が生誕130周年だったことで分かるように、初三郎は138年前に京都で生まれました。1884年(明治17)3月4日に生まれ、1955年(昭和30)8月16日に亡くなりました。最近はずっかり有名になり、教科書にも載っています。これは娘の中学校の教科書です。お父さんの本の絵が載っていると行って、持ってきました。以前『空から日本を見てみよう』という番組がテレビで放映されていましたが、2000年代になってからはドローンを使って、簡単に空からの映像を見られるようになりました。しかしながら、138年前に空から地上を見ることは、ある意味で人間の悲願であり、空から地上を見たいという思いを具現化してくれた人です。

### 初三郎と鳥瞰図の出会い

最初に初三郎の作品について話したいと思います。先ほど言いましたように、彼は138年前に京都に生まれました。最初は西陣織の工場に丁稚奉公に行き、図案を考える仕事を

していました。しかし、どうしても自分の絵を描きたくて、絵を習いに行きました。すぐに頭角を現した初三郎は、1917年(大正6)には既に、有名になっておりました。『京都日出新聞』や『大阪時事新聞』に取り上げられ、果てはイギリスの『コマーシャル・アンド・インダストリー』という雑誌にも、現代版の広重だと紹介されました。とんとん拍子で彼は鳥瞰図を描くに至ったのです。そのきっかけを与えたのは、この右側に書いてある彼の肖像画を描いてくれた鹿子木孟郎でした。この人物が初三郎に鳥瞰図を描く道を示しました。

話が前後しますが、1929年(昭和4)には既に彼のコレクターが現れていました。鹿子木孟郎は、京都画壇の洋画の非常に有名な先生でした。先ほど言ったように、初三郎は西陣織に丁稚奉公に行き、図案を考えることをしていましたが、そこから一步踏み出す形で、好きな絵を描きたいと鹿子木孟郎の門をたたき、彼に絵を習うことになりました。初三郎が実際に描いた絵はかなり上手な絵でした。しかしながら、鹿子木は初三郎に「応用芸術家」の道を勧めました。

当時の日本の広告ペンキ屋が描くものでした。これはこれで一つの芸だと私は思いますが、鹿子木は芸術を勉強した人が広告を描いたほうがいいのではないかと思ひ、そのような道が君にはあると初三郎に示しました。初三郎はその言葉を聞き、社会のためになる仕事をしてみようとその道に踏み出しました。はじめに幾つかの仕事をしたうちの一つが1913年(大正2)の京阪電鉄『京阪電車御案内』です。電車の路線を赤丸印で並べて描き、京都から大阪まで電車が通っている様子を山並みと共に描いた絵です。これだけのことですが、皇太子時代の昭和天皇がこの絵が掲げられた電車に乗り、「これはきれいで分かりやすいので、東京に持ち帰って学友と分かち合いたい」という話になったと言われています。天皇陛下に褒められたことで、彼は全国の風景を描いてみようと言っています。

## さまざまな鳥瞰図

彼の鳥瞰図は大きく2種類あります。一つは印刷折本の鳥瞰図です。この鳥瞰図は外国人向けに英語で解説が書かれています。雲仙を描いたこの鳥瞰図は、8つに折ることができて、折るとシステム手帳のバイブル・サイズです。折りたむと縦が十数センチメートルで横が6センチメートルから7センチメートルほどの長方形の札のようになります。伸ばすと横が五十数センチメートルの長い鳥瞰図が、印刷折本です。こちらが表で、われわれが初三郎の鳥瞰図と呼んでいるものです。

ここにはありませんが、この鳥瞰図には裏があって、そこには細かくその地域のことが書いてあり、表の絵の描写内容が説明されています。それから、折るとここに表紙が付きます。これは開いた状態です。このゴルフをしている表紙絵はここで2つに折れます。この観光船を描いた裏紙絵は、ここで2つに折れます。こうした表紙はいろいろなバージョンがあり、違う版が出されています。いわゆる異版で、版の異なる鳥瞰図が同じような絵でたくさん描かれています。

先ほども言ったように、昭和の初めにコレクターが現れたほどで、一説には1600枚ほど、多い人は2000枚ともいう印刷折本の鳥瞰図があるといわれています。その総体ははっきりしていません。それは少しだけ違うパターンが複数あるからです。例えば、これは雲仙の温泉町を描いていますが、ここにある1軒の温泉旅館に頼まれて描くときには、この旅館を大きく描き、名前を冠した鳥瞰図を付けて売り出しました。絵はほとんど同じですが、書いてある言葉が少し違います。そのようなことがあるので、異版が大量になったのです。今回の出版では、それを私が整理し、本としてまとめました。

印刷折本と並ぶもう1種類は、絹本彩色の鳥瞰図です。これは本当の日本画です。絹地のキャンバスに胡粉や岩彩を使って描きます。例えば、これは『伊勢両神宮鳥瞰図』で、現在は伊勢神宮の徴古館にあります。何年か前には、徴古館の入り口から入ると正面に飾ってありました。現在はどうなっているか分かりませんが、非常に大きなものです。縦が2メートルほど、横が十数メートルあります。初三郎はこういった非常に大きな絹本も描くことができました。

よくあるパターンは、例えば、名古屋市が初三郎に鳥瞰図をお願いすると、一方では印刷折本を何千部か納めます。もう一方では同じ構図で絹本を描き、一部納めます。こうした絹本彩色鳥瞰図が、地方都市にはいくつか残っていて、市の議場の正面に飾ってあったり、どこかの倉庫に眠っていたりすることがあります。これらはあまりに大き過ぎて、飾る場所が難しいのですが、非常にステータスなものであったようです。

## 印刷技術の変化

印刷折本は、印刷の技術が変わりつつある時代で、石版印刷からオフセット印刷に移行する時期の鳥瞰図でした。石版印刷で有名なものは、ご年配の方は分かると思いますが、赤玉ポートワインというワインの広告です。上半身の肌をあらわにした日本髪を結った女性がワインを持っている広告で、石版印刷の代表作品です。この後に、広告は次第に写真製版によるオフセット印刷に変わっていきました。

初三郎の印刷を見ると、大正2年から大正末年までは数色の石版印刷です。ところが昭和初年から昭和11年までは、同じような石版印刷ですが、版の数が非常に多く、12回ほど版を重ねて刷る多色刷りになっています。これは観光社の出版を担っていた和多田印刷株式会社によるものだそうです。それから、1936年(昭和11)以降は写真製版と、オフセット印刷の4色あるいは6色の印刷になり、描写が変わっていきます。

同じ頃、初三郎の事情も変わりました。初三郎と一緒にアトリエで働いていた人が独立していった時期でもありました。彼が最も勢いよく仕事をしていた時代は、昭和初年から10年ほどでした。戦争に突入する前の非常に鮮やかな昭和の文化があった時代です。

例えば、12色がどのようなものだったのかというと、上側が第1期の昭和初年までの石版印刷で、数色で刷ったものです。同じ場所を描いたもので、12回繰り返して刷るとこのようになります。少しの違いかと思うでしょうが、この微妙な岩肌の表現やこの辺りのぼかし方が圧倒的に異なり、見て分かります。これは犬山を描いています。大きな鳥瞰

図の一部で、右に行くと犬山城があり、犬山城から木曾川をさかのぼっていった辺りの日本ラインの景観が描かれています。彼はこの岩の表現を何度も描いています。何度も描いているのには理由があり、ここに初三郎のアトリエがあったからです。

### 初三郎のアトリエ

彼は京都出身ですし、最初は鹿子木孟郎に言われ、その膝元である山科にアトリエを構えます。その後、東京に打って出ます。東京で順調に仕事をしていたら、関東大震災に遭いました。それで一切合切を捨てて、犬山に來ました。彼が東京で居を構えていた場所は鉄道同志会という、民間の鉄道会社の社長たちが集まって日本の民間鉄道の未来を話し合う、あるいはそれぞれの問題を相談し合う場所がありました。初三郎は鉄道同志会の建物の2階にいました。1階の会議室である鉄道会社の社長が、どうしたら集客できるかと相談すると、別の鉄道会社の社長が鳥瞰図を作って宣伝をすると売れて、皆が来ると話します。その鳥瞰図は誰に描いてもらうのかと聞くと、上に初三郎がいるからということになり、それで仕事をもらっていたようです。

初三郎は関東大震災でこのシステムを全て失ってしまいました。そのときに、彼の窮状を救ったのが名古屋鉄道の上遠野富之助です。この人は後々、名古屋鉄道の社長になる人で、使っていない社員寮が犬山にあるので、そこをアトリエに使ってもいいと言ってくれました。それで犬山からさらに北にある日本ラインの河畔の風光明媚な場所にアトリエを構えました。

ここに彼がいたのは、昭和の初頭から1936年(昭和11)までの10年間です。これがアトリエの様子です。眼前に木曾川が流れています。皆さんも行ったことがあるかもしれませんが、川沿いに道があり、この辺りに犬山城、そして犬山ホテルがあります。その奥に成田山があり、モンキーパークはさらに奥にあります。そのモンキーパークから河畔に下りてきた所に氷室交差点があり、その辺りに初三郎が最初に上遠野から借り受けた社員寮がありました。ずっと借りているわけにもいきませんので、そこから北にある不老滝のもとにアトリエをつくりました。現在もその場所は空地のような形で残っていて、アトリエの建っていたであろう跡を想像することができます。

アトリエの中の様子を描いたこの絵では、ここに大正広重と自分で書いていますが、初三郎がいます。富士山が描いてあり、はげで大きな絹本の空を塗っているところでしょう。一方で、絵の具を調合している人がいて、細かい絵を細い筆で書いている人がいます。このような形で何人かで絹本の大きな絵を描いていたことが分かります。決して彼1人で描いていたわけではありませんでした。先ほど話した印刷折本は、これとはまた別に小さな版を起こして、それを何枚も重ねて刷っていました。これは基本的には浮世絵の製作手順と同じで、原画を描く人と版を作る人とは別の人です。このように、こちらも決して彼1人で作業をしていたわけではありませんでした。初三郎の鳥瞰図と一言で簡単に言っていますが、必ずしも彼1人で描いた訳ではありませんでした。



## 移転と共同制作

彼は1936年(昭和11)に突如、彼は蘇江画室と呼ばれるこのアトリエから、八戸の種差海岸へ引っ越しました。それから、さらに広島等の各地に行き、最終的に京都で亡くなりました。八戸の種差海岸もとても日本とは思えない素晴らしい景色の場所ですが、東日本大震災で被災しました。しかし、津波は来たけれども、それほどひどいことにはならなかったようでした。現在はどうなっているか分かりませんが、東映のオープニングのような、岩に波がかかるような景色が目前にあり、その手前に芝生が広がっていました。さらにその手前の小高い丘の上に彼のアトリエがありました。火事で焼けてしまったので建物自体はありませんが、敷地に土台が確認できて、非常に大きなアトリエがあったことが分かります。

初三郎がここまで有名になれたのは、先ほども言ったように、多数の人が一緒に働いている組織だったからです。初三郎のアトリエといえども、皆で働いている場所でした。最初期には小山吉三・金子常光、中田甚吉らと仕事をしていました。スタジオジブリだと思ってもらえれば分かりやすいでしょう。宮崎駿1人で仕事をしているわけではなく、その周りに高畑勲や鈴木敏夫など、プロデューサーや同じ方針で絵が描ける人がいるのです。彼ら以外にもイラストレーターなどがたくさんいる点でも似ています。中でも小山吉三はプロデューサーの役割をしていました。そのうち、これほどもうかるのであれば、自分たちでも始めようと商売っ気を出し、ある日突然、独立してしまいました。けんか別れのような形にはなりましたが、そのうちに、初太郎も認める存在となりました。

## 鳥瞰図の需要と評判

それから、ここに三羽がらすと書いてありますが、杉浦五郎、前田虹映、稲垣満一郎の3人は、その後、彼の仕事を支えています。ですから、初三郎が描いた絵というよりは、むしろこの人たちがしっかり描いていたというべきでしょう。特に前田が描いた山並みの表現は非常に美しいものでした。この絵は金子常光が描いた松本の町です。金子の鳥瞰図は、少し初三郎よりも線が繊細です。初三郎が編み出した鳥瞰図を元に観光案内図を作ることが一つのスタイルとなり、初三郎のアトリエの有能な画家が次々に独立をしていきました。その中でも初三郎の鳥瞰図は非常に売れ、別格であったようです。

ところで、絵を描く人がいてもそれを買ってくれる人がいなければ画業が成り立ちません。その買ってくれる人たちがここに書いてある人達です。数々の民間の鉄道会社の社長が、先ほどの『京阪電車御案内』の延長線上で、自分の鉄道会社でもという形で注文しました。こうした民間鉄道会社の中でも後に近鉄となった大阪電気軌道は、種田虎雄や金森又一郎、また、先ほど説明した名古屋鉄道の上遠野富之助らが初三郎の後ろ盾になりました。

もう一つの後ろ盾は鉄道省です。この影響は非常に大きかったと言えます。鉄道省の生野団六とのつながりを通じて、鉄道省の仕事をいくつか受けます。仕事は鉄道会社だけではありませんでした。油屋熊八は別府の温泉町を大きくした立志伝中の人ですが、この人

が別府を宣伝するために初三郎に絵を依頼しました。船会社からの依頼もありました。このように、交通や観光を中心としたさまざまな実業家が初三郎をバックアップしました。さらに、一介の画家の仕事のこれだけの後ろ盾を付けるためには、お墨付きを与えなければいけませんでした。もちろん最終的に彼が認められたのは、自身の人間性だったのだろうと思います。昭和天皇が最初に、この絵は分かりやすくいいと言ってくれたことが最大のお墨付きではありますが、それ以外に、そのときに昭和天皇に随行していた徳川家達や二荒芳徳らの公家も、彼の絵を褒める言葉を残しています。

一番面白いのは京都大学の先生たちで、新聞等で初三郎の絵を褒めています。それは京都大学の法学部や文学部の文系の先生たちで、その中でも有名な黒板勝美は当時の風景について、新聞で初三郎の絵について発言しています。また、吉屋信子や徳富蘇峰などの文筆家が彼の絵について言葉を残しています。このようなバックアップで彼の鳥瞰図は単なる交通案内のパンフレットを超え出て、もう一段階、上にいくことができました。

### 出張した名所でのスケッチ

彼はどのようにして鳥瞰図を作っていたのでしょうか。実際に1933年(昭和8)の労作月誌が残っています。彼は何でもかんでも記録に残そうとする人でした。この月誌報告によれば、例えば、1月は北海道の登別温泉にいたと書いてあります。その後、二見の夫婦岩にいとあり、伊勢や鳥羽に行ったことが分かります。北海道から伊勢へ行き、伊勢で名所図絵を描き、今度は日光に行くと書いてあります。1月と2月を見ただけでも、北海道から伊勢、それから日光へ行くというかなりの出張をして、その後、また北海道に行っています。そして、また伊勢、熊野、朝熊山へ登って、伊勢湾を見ると書いてあります。

5月には兵役に行き、6月には甲州山梨の身延山、7月は富士山、8月は樺太に行き、9月には醍醐寺三宝院へ行ったと書いてあります。京都へ行き、さらに奈良にも行っています。このように1年中、旅行してアトリエを空けています。これだけの出張をしていて、どのように描けるのでしょうか。描いてなかったのではとも思ってしまう。先ほども言ったように、アトリエには一生懸命、描いてくれる同志がいました。同時に彼は、一定のクオリティーの鳥瞰図を上手に描くことが出来ました。

ではなぜ、そのように描けるのかと聞かれたときに、1番は実際に現地に行ってスケッチすることだと答えています。それから、頭の中で構想を考えることだと言っています。頭をひねり、どこからどちら向きに描こうかと考えるそうです。そして、下図を考え、色を付け、装丁を考え、編集するそうです。これが一連の流れだそうです。気になるのは、次の一文です。常に一つの中心を定め、これに基礎を置き、さらに部分的なスケッチを幾百枚と集め、これを全交通に当てはめて、初めて、山水のふちが決定されると書いてあります。この絵の中心は何かを必ず考え、その次に考えていたのは山水ではなく、交通でした。そこに行くにはどのように行くか、そして、それをどのように描くかを頭の中に置きながら、山や海面、河川などの水面を描きました。それが一つの方法だと話しています。

## 多作の方法

先ほどの労作月誌は1933年(昭和8)でしたが、1932年(昭和7)には年間製作点数の最高記録を出しました。1年間に39点も発行しています。ひと月に3枚以上描いています。日本画をしている人に聞くと、その量なら描けると言いますが、これを印刷するまでに仕上げ、多くの人と共同作業で作るとしたら、一つの作品を作るだけでも、いろいろと指示しなければいけないはずで。しかし、あれほど出張をしていたら、どのように指示していたのでしょうか。電話も電報もあったかもしれませんが、それらで伝えられる量は限られています。

そこでいろいろと考えてみたところ、二つの方法しかなかったように思います。自分の代わりに、あるいは自分と一緒に絵を描いてくれる画工と、刷り師が完全に分業体制になっていて、自分の役割がはっきりしている方法です。もう一つは、今回は、あれねと言ったら伝わるパターンがあったはずだったであろうということです。そうでなければ、年間何十枚、あるいは全体として1600枚から2000枚といわれる数に至ることはできないでしょう。分業体制については、先ほどのスタジオジブリのことを考えれば、すぐに分かると思います。

## 鳥瞰図のパターン変化

むしろ私が関心を持ったのは、2番目の、彼らがどのようにパターンを認識していたのかということです。アトリエに共通の言語はどこにあるのだろうと考えていました。そうすると、その出発点がこの本にあることが分かりました。これは『鉄道沿線鳥瞰図』で、鉄道省が出していたガイドブックです。鉄道省はそれ以前からガイドブックらしきものは出していましたが、決定版のようなものを1921年(大正10)に作りました。それがこの左側にある、大正10年版の鉄道旅行案内です。これはA5サイズを横向きに開く版です。

ちなみに現在、このようなノートが流行しているらしいです。縦長のノートを開くとパソコンが置けなくなるので、テレワークのためにA4のノートを半分に切ったようなノートが売れているそうです。A5サイズを横向きに開くと、絵は自ずと鳥瞰図的にならざるを得ません。この版で旅行案内図を作りましょうと、鉄道省に持ち掛けたのが初三郎でした。初三郎が言い出したことによって、鉄道省の旅行案内は横型で、細長く開く版となって、その中に文字が縦に書かれることになりました。

ところが、1936年(昭和11)、初三郎が苦心して考えたこの版は、突然、通常の単行本のように縦向きに開く版型になります。ごく普通の単行本のサイズになり、開くとそこには初三郎の鳥瞰図ではなく、なぜか、安藤広重の東海道五十三次が入っていたり、写真が入っていたりしました。

ここで一体何があったのでしょうか。先ほども言ったように、1936年(昭和11)までは、名古屋など、東海近辺でアトリエを構えて頑張っていた時期です。初三郎はこの後、八戸に行ってしまいます。それと同時に、一緒に描いていた有力な画工がいなくなります。延々と続けてきた鉄道旅行案内の仕事もなくなりました。この鉄道旅行案内は、初版からは

五十版まで版を重ねています。実は、この仕事の中で彼はパターンを見つけることができたのではないのでしょうか。横向きに版を作ることで細長い絵を描き、この版型に合わせた鳥瞰図のパターンをここで確立したのです。それはまた後で説明します。

## 東京での活躍

初三郎は1920(大正9)に鉄道同志会の2階で、大正名所図絵社を設立しました。そこで山梨の加賀見平八郎など、さまざまな甲州財閥と出会い、多くの民間鉄道会社と一緒に仕事をしました。この時期にもう一つ、初三郎を有名にしたのが上野公園で行われた平和記念東京博覧会です。この建物は、博覧会の交通航空館で、名古屋の八勝館を設計した堀口捨己という人物が設計したものでした。これはその建物の平面図です。この建物に入っただけですぐ脇の壁面に初三郎の鳥瞰図が飾られました。この鳥瞰図は、尋常ではないサイズと内容の鳥瞰図で、一躍有名になりました。『日本交通鳥瞰図』と名付けられたこの鳥瞰図は、幅が48尺ですから15メートルほどで、高さが9尺ですから2.7メートルほどです。非常に大きな鳥瞰図でした。

その内容はこちらです。これはその後印刷折本として作られたものですが、内容は絹本彩色の現物と同じです。その中身は日本列島をひっくり返して見る鳥瞰図です。満州の辺りから日本列島を逆さに見て、ここが朝鮮半島、左側にアメリカ、右側にヨーロッパ、そしてアフリカです。先ほどの紹介した『鉄道旅行案内』にも同じ構図の鳥瞰図が載っていますが、これを見ると南極という文字が読み取れます。

初三郎はこの鳥瞰図を見た人々は度肝を抜かれたと思いますが、実は江戸時代に歙形蕙斎という人が同様の絵を既に描いていました。それはエビ図といって、エビのように日本列島をくの字に曲げて描いています。伊勢湾がここで、東京湾がここです。この鳥瞰図は日本列島を太平洋側から朝鮮半島に向かって見えています。その向こうに大陸が描いてありますが、初三郎はそれの逆さまから見た絵を描きました。このように、初三郎は下絵とした絵を上図に利用して描いたことが分かると思います。

## 鳥瞰図のパターン

『鉄道旅行案内』だけでなく『観光』や『観光春秋』、『旅と名所』など、彼はリーフレットを自ら出版しました。自分の墓石も作りました。最終的に1955年(昭和30)の8月16日に京都の当麻寺に眠っています。事情があり、東京にもお墓があります。

初三郎が残した作品をひとつずつ調べる中で、疑問点がいろいろと出てきました。その中で最大の疑問点となったことが、初三郎は鳥瞰図をパターンで認識していたらしいが、どのようなパターンだったのかです。初三郎は鉄道省に掛け合い、大正10年版の『鉄道旅行案内』の挿絵は自分の本意ではないので、描き直させてくれと言って、大正13年版で全面的に描き直します。

『鉄道鳥瞰図』では、鳥瞰図だけではなく、こういった実際のアイレベルの描写も描かれています。これは東京駅で、これは乃木神社です。パースの消失点を正確に取った絵です。



非常に上手に描いています。東京駅も詳細に観察して描いてありますし、東京駅がここで折れ曲がっていることもきちんと描いてあります。大正13年版には、このようなアイレベルで描かれた名所旧跡が28点あり、それ以外に鳥瞰図が102点あります。この内の54点が新しく描き直されたものでした。

さて、1924年(大正13)までに、『鉄道旅行案内』の挿絵を描く中で、彼は全国の町を横開きの構図に収めました。彼は宝物を手に入れたわけです。鉄道省のお金で全国を回り、全国の町をいくつかの構図で描き、この町はこちらから見たほうがいい、この町はこの描き方がいいという、その町々に特有の描き方を手に入れました。こちらは犬山を描いた挿絵です。犬山城がここにあり、不老滝がここにあり、岩肌の表現について述べたのはこの辺りです。こちらは岐阜を描いた挿絵です。岐阜城が真ん中にあり、そのふもとに岐阜の町があります。このように、それぞれの町の特徴を一網打尽にする構図を見い出しました。

## 5つのパターン

これらの100点を超える鳥瞰図をいくつかに分けてみました。そうすると、五つほどのパターンしかないことが分かりました。1点目は、最初の『京阪電車御案内』を考えれば分かりますが、手前に川や海が描いてあり、後ろに山が描いてある、シンプルに、駅の名前が一直線上に並べられるパターンです。2点目は、河川などの水景が画面を横切るように描かれて、山や神社を主題とするパターンです。3点目は河川などの水景が画面の両側に回り込んで描かれ、真ん中に山や島が大きく描かれているパターンです。安芸の宮島が真ん中に描かれ、海が画面両側に回り込んで描かれたこの挿絵は、そのようなパターンの典型です。

4点目は、町を描くときに多いパターンです。後ろに背景になる山を、手前に町を描いてそれらを、川や海で取り囲みます。最後の5点目は、実際に自分がそこに立って描いた場所があるパターンです。自分が高い場所において、遠くに海や川、湖があり、往々にしてその先に富士山が描かれるパターンです。すべての挿絵はこの5点に分かれます。

大正10年版と大正13年版の違いの1点目は、大正13年版ではより見下ろす構図が増えていました。それらはアイレベルで乃木神社を描いたものではなく、パターン5の鳥瞰図が多くなっていました。2点目は道が描き足されてきました。特に山道です。富士山の登り方など、山道がていねいに描かれています。3点目は町中の屋並みが表現されていました。この3点が変わっていました。

また、構図そのものも大きく変わっていました。それは先ほど説明した構図1や構図2の水平方向に鉄道の線路が右から左へ進行するだけだったり、線状になって川が流れているだけだったりする線状形式から、真ん中に描きたいもの、中心になるものを描く集中形式に変わっています。

ここで、初三郎が描いたことはどういったことだったのかともう一度、考えてみましょう。明治になり、日本全国に鉄道が敷かれました。鉄道が敷かれると、日本は線路で隅々まで連結されて、ひとつの近代国家としてまとまります。それまでは地方ごとに分かれて

いたものが、鉄道によって中央集権化していくとも言えるし、ネットワークに組み込まれるとも言えます。初三郎は逆にそれを見開き2枚のページの中に区切ってしまいました。102点の風景の中に切ってしまったのです。鉄道で全部がつながったことの裏の姿を彼は描いたと言えます。見開き2ページの中に集中形式で描かれた風景は、この地域であればここで、こちらの地域であればここというように、一つのまとまった地域を鳥瞰図として表現することに成功したと言えます。鉄道によって敷衍される近代化の中で、人々は初三郎の鳥瞰図によって自分たちのいる世界をもう一度、確認することが出来たのです。

## 軍隊と鳥瞰図

鉄道省と組んで何かをしたり、あるいは鉄道会社と組んで何かをしたりするだけに止まりませんでした。初三郎はさらに新しいクライアントを発見しました。それは軍隊とともに歩む新しいクライアントのあり方でした。第二次世界大戦までは陸軍大演習という軍事イベントが定期的に行われていました。陸軍大演習が行われるに際して天皇陛下が閲兵に來られました。名古屋に御幸山という山がありますが、そこは天皇陛下が立ち、天白川の辺りで演習する兵隊の様子を見られた場所です。そのとき、地図を広げ、誰かが天皇陛下に説明します。その地図をもっと分かりやすい絵にすることはできないかということで、この鳥瞰図ができ上がりました。愛知県鳥瞰図はそうして生まれました。

これはこの手の鳥瞰図の第1号です。演習を行う場所のいろいろな地形を説明するために、初三郎がこの絵を描きました。名古屋城の中に御座所が造られましたが、そこにこの絵が飾られました。初三郎はその功績をたたえられ、賞状をもらっています。天皇陛下も気に入られ、初三郎は愛知県鳥瞰図としてこれを売り出しました。そうすると、非常によく売れたので、茨城県、広島県、岡山県など、演習の後に県を単位とする鳥瞰図が必ず出ました。その他にも熊本県、大阪府、石川県、埼玉県、北海道など、陸軍大演習に合わせて、県別の鳥瞰図が描かれました。

## 日本八景の選定

初三郎は、日本八景も描きました。この日本八景については、進士五十八先生が面白い話を書いておられます。その当時の日本国内の人口は6100万人だったにもかかわらず、新聞社が日本八景を決めましょうと投票を募ったところ、投票されたはがきの数は9348万票で、人口より多い数が投票されてしまったそうです。1人で何枚も投票したということですね。

初三郎はこのことに口出しして、彼のアトリエにあった木曾川の日本ラインの風景が、日本八景の河川部門から漏れるらしいという話を聞き及ぶと、選定委員会の知り合いに木曾川を絶対入れてくれと、毎日、電文を送りました。当時は南満州鉄道株式会社の委嘱で奉天のヤマトホテルを本拠に調査をしていました。木曾川、危うし、と聞かや、審査員全員へ日文矢文の長文電報を奉天から打ちまくったと書いてあります。これがどれほど審査員の諸氏を動かしたかは、後日、吉野熊野国立公園を実地踏査した際、同行した本多

静六博士や石川栄耀技師が証明したようです。

本多静六は当時の造園の重鎮です。日比谷公園を設計した人で、日本の造園を一手に握っていた造園デザイナーです。また、石川栄耀は戦前の名古屋の町をつくった立役者です。東京の歌舞伎町をつくったのもこの人です。初三郎はこのような近代都市を造った人々と会い、いろいろな話のできた人物だったのです。結果的に木曾川も入選した日本八景の鳥瞰図のシリーズを描きました。

初三郎は異様な郷土愛を描こうとしていました。先ほど鉄道でつながった日本列島を102枚かに分けて描いたと言いましたが、彼はそれぞれの風景に異様な思い入れがありました。『郷土研究』という雑誌が出版されて、郷土という言葉が生まれたりしたのは昭和初期のことでした。この時期に郷土の風景を彼が描いたことが皆の心を打ちました。

## 海岸と島

同じ頃、初三郎は海岸を描くことにこだわりました。海岸岩五題と題して、尾張のつぶて浦、常陸の五浦、東尋坊、佐渡、朝鮮を海岸風景として描きました。柳田国男が海岸に松が多過ぎると言い出した頃で、海岸の風景は白砂青松がめでられるのではなく、むしろ、先ほど話しました東映のオープニング・シーンのような、岩に波がくだけ散る当たる風景を皆がめで始めたのです。このことは風景論を提唱した本多静六なども言っていましたし、宮中歌会始の1918年(大正7)のお題は『海辺松』でしたが、1930年(昭和5)は『海岸巖』で、海岸の岩が一つのテーマになりました。

海岸の他に、初三郎は島を描くことにもこだわりました。日本橋の三越で1925年(大正14)に島に関する展覧会を行っています。瀬戸内海の鳥瞰図、弁天島と浜名湖、篠島と知多半島、竹島と蒲郡、これらを並べた展覧会でした。彼はこの時期に一つの風景の描き方を見つけました。先ほど言った鉄道省の観光案内図の中で見つけた方法と並んで、もう一つ、彼が発見したのは画面に大量の島々を散りばめて描く方法です。これは瀬戸内海の航路です。ご存知の通り、瀬戸内海は多島海で、多くの島を描かざるを得ませんが、この『歴代御陵巡拝図絵』では、歴代天皇の古墳を1枚の絵の中に全て、島のように描いています。平野が黄色く描かれていますが、これを青色にすると、瀬戸内海の描かれ方と同じです。以後、彼は絵の中に小さな島を数多く描くという技を好んで使い始めました。

## 都市の拡張

名岐鉄道の沿線案内図でも、稲の穂で一面黄色く塗られた田が広がる中に小さな町が点々と島状に散りばめられた風景を描きました。実際にそのような町だったのです。こうした多島海の描写には、彼にとってどのような背景があったのでしょうか。先ほど本多静六や石川栄耀の話をしました。明治以来、彼らは都市を拡張することを考えていました。関東大震災の直前には、六大都市という概念が出てきます。これは日本の大都市が6つということではなく、大きな町に拡張する町が6つあるという意味です。物理的に大きな町ではなく、拡張する町が東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸の六つということなのです。

例えば、名古屋なら戦前はこれだけの範囲でしたが、それを庄内川と東山で囲まれた範囲まで広げます。東京なら、これだけの範囲でしたが、武蔵野台地の奥のほうまで広げます。京都は右京の方向に広げることを考えていました。これは1920年(大正9)に制定された都市計画法の結果にできたことです。法律は制定されると、そこで一気に変わると思いがちです。しかし、実際は徐々に変わっていくものです。都市計画法は1920年(大正9)に6つの都市から始まり、1933年(昭和8)までに全国の市町村に通達が出されました。

したがってこの期間は、ある町は都市計画法の網がかかって新しい近代都市に変わっていき、ある町は明治以前の町のままで、それらが同時に存在している時期でした。この期間に町が拡張される様子を初三郎は描いたのです。拡張される名古屋の町の都市計画を考えたのが石川栄耀で、初三郎が吉野熊野で会って、木曾川のことはよくやったなと言ってくれた人です。この写真の後ろに掛かっていますが、これが初三郎の絵ではないかと私は推測しています。

ところが、名古屋の都市計画を行った後で、石川が言ったことは、大都市をつくるのではなく、小都市をつくることでした。それを小都市主義といいます。例えば、石川が提案したのは、ここは八事、ここは志賀、この辺りは惟信というふうに、小さな町をたくさんつくり、拡張された名古屋の郊外を区画整理する方法でした。新しく発見された小さな郊外の町の様子を初三郎は描きました。この鳥瞰図は名古屋のさらに外側、今の牧野ヶ池緑地の場所です。そこで住宅地開発をしている様子が描かれていますが、真っ白に描かれています。あるいはこれは博多ですけれども、博多の箱崎の先にある埋立地で、香椎浜の辺りです。ここでも新しい埋立地が真っ白に描かれています。これが初三郎の描いた新開地でした。

### 初三郎の鳥瞰図の背景にあるもの

このように、彼は様々な対象を描くために色々な描写方法を編み出しました。これらの描写方法を創出するために、彼は幾つかの過去の絵を参考にしました。初三郎の鳥瞰図の系譜の一つは、街道沿いの様子を描いた道中図です。有名なものは『東海道分間絵図』です。分間ですから、1間を1分にしました。つまり、18メートルを3センチメートルにして、600分の1で東京から京都までが描かれています。道のおおよその形と間口は正確ですが、奥行き方向は少し不正確です。この系譜の絵はいくつかあります。道中図は戯作化していき、街道を曲げて描かれた絵図が登場します。こうした絵図を実際の風景に重ねて描いたのが五雲亭貞秀でした。絵図の系譜の一つとして、初三郎の知多半島の巡拝図絵はあるでしょう。この知多半島の巡拝図絵の構図はここで終わっていません。この絵の構図は朝鮮を描くときに、そっくりそのまま使われます。彼が描いた朝鮮と知多半島はそっくりです。

初三郎の鳥瞰図の系譜もう一つは、『鉄道旅行案内』です。皆さん、「汽笛一声新橋を」という鉄道唱歌をご存知でしょうか。この歌詞は皆、よく知っていると思いますが、当時出版された本にはその下にこの絵が描かれています。先ほどの道中図と同じような沿線の様子が下に描かれています。こうした鉄道沿線を描いたシリーズはこの他にもいくつか



出版されました。さらにもう一つの系譜は俯瞰図です。16世紀頃から、町や寺社を上空から描く方法がありました。江戸期には、こうした俯瞰図は真景図と呼ばれるようになります。その際雲を描かないことが初三郎の矜持になっていました。『洛中洛外図屏風』はこうした俯瞰図の代表ですが、雲だらけです。雲の間に間に描かれていることは、それぞれ、正しく描かれています。しかし、雲だらけで全体の関係が分かりません。このことに対して、初三郎は絶対に雲は描かないと書いています。

それから、東京を描いた鳥瞰図は1枚だけです。東京市を描いたのは子ども向けの『少年倶楽部』という雑誌の付録だったものだけで、あとは見つかっていません。それほどまでに地方都市を描き続けたのです。初三郎は一つの対象をいろいろな方角から描いています。例えば、知多半島なら、南から描き、最終的には西から描いています。

最後の系譜はパノラマです。西洋のパノラマが日本に入ってきて、江戸後期に描かれた絵が出現しました。実際に初三郎が活躍する少し前、明治20年代から明治末年にかけて、パノラマ館が日本全国に多くつくられました。明治・大正に人々は、パノラマ館を通じて横方向にもものを見るという経験をしていましたし、初三郎は、このパノラマ画を描くパノラマ画家をよく研究した形跡があります。名古屋の町を描いたこの絵のように、上空から魚眼レンズで見たような絵が描けたのは、初三郎がパノラマを知っていたからです。

このように、初三郎の鳥瞰図には必ず背景となる絵があり、彼が独創だけで描いているわけではありませんでした。初三郎は、過去の絵をよく勉強して、勉強したことを上手に組み合わせ、さらにそれを上手に売り込むことができるという、稀有な人物でした。しかも、失われつつある郷土の姿を小さな単位として区分して描くことができたことが、彼の絵がいまだにわれわれの心を打つ、最大の理由だろうということです。

初三郎の鳥瞰図は、この近辺では東浦町郷土資料館(うのはな館)にコレクションがありますので、是非訪れてみてください。長くなりました。どうもありがとうございました。これで終わります。

(質問) 先生は全ての鳥瞰図が好きだと思いますが、その中で一番好きな都市の好きなのところを一つ教えてください。それと戦国時代は戦争をしており、例えば、鶴越や信長が小谷城を攻めたことなど、軍用の戦略上の地図を描いたと思います。吉田初三郎はよく勉強していた人ですので、それらと関係あるようなものはありますか。最後に西陣織の地で生まれたようですので、西陣織との関わりでエピソードがありましたらお願いします。

どれも非常に難しい質問です。一番好きな鳥瞰図は、先ほど見せた非常に大きなスケールの日本全体を描いたものです。その壮大な構想は素晴らしいと思います。もう一つは、初三郎の鳥瞰図を見たときに誰もが思うことだろうと思いますが、自分の家の辺りはどのように描かれているかと、自分にゆかりのある場所を探してしまいます。この意味では、個人的には愛知県鳥瞰図や東海地方の鳥瞰図が好きです。

それから、戦国時代の話ですが、実は大事な指摘です。例えば、彼は長野で武田信玄と

上杉謙信が戦った川中島の合戦場の跡などを一生懸命描いています。それがよく見えるように長野電鉄の鳥瞰図を深く描いています。それらは当然、多くの資料を集めた結果であって、その情報収集力は大したものです。京都大学の先生などつながりが大きかったのではないかと考えています。言われるとおりで、初三郎は古戦場や合戦場を反映していると思っています。

西陣織の話は、彼のアトリエの中の様子などに影響が見られると思います。あれを見たときに、染物屋のようだと感じました。私は叔母が染物屋に嫁いでいて、その工場を見に行ったことがあります、全く同じ風景です。

(質問) 1936年(昭和11)を境に、鉄道案内から初三郎の絵が消えたという話でしたが、それは例えば、中国や満州で戦争が迫ってきたことと関係があるのですか。

1940年(昭和15)頃にはいろいろな戦時統制が始まり、空からものを描いてはいけなくなりました。そうすると、彼は何もできなくなります。初三郎はそれをいち早く察して、1938年(昭和13)頃から従軍画家になり、戦争中はこの仕事でそれでしのぎました。こうした動向を考えると、鳥瞰図を描くことが難しくなることをうすうす感じていたのかも知れません。同時に、彼の昭和ひと桁代の頃の仕事のほとんどは国内のものでしたが、1936年(昭和11)頃から統制が始まる直前は北海道や樺太、満州などを主体的に描き始めます。ですから、興味関心が内地から外地へ移っていったと考えられます。

(司会) まだ質問があるかもしれませんが、時間も過ぎていきますので、これで終わります。

ありがとうございました。

## 付記

本稿は、2022年6月21日(火)に開催された地域を学ぶ歴史講座「知多北部・名古屋南部の歴史を探る」の特別講演会「吉田初三郎と鳥瞰図」をもとに作成しました。